
作家・北杜夫が死んだ件について

fumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作家・北杜夫が死んだ件について

【Nコード】

N9711X

【作者名】

f u m i a

【あらすじ】

故人に対し、丁重にお悔やみを申し上げます。北杜夫先生、本当にお疲れ様でした。安らかに眠り下さい。

今日、PC上でのメールの遣り取りと、専門関係の資料を漁りに大学の図書館に行った。

用件を済ませてその帰り際、ふと思いつて入り口近くの新聞コーナーに寄った俺は、何気なく普段愛読している朝日新聞を手にとった。その瞬間俺の目に信じられない文字が飛び込んで来た。

『北杜夫氏、逝去』

「嘘だろ……！」

昼休みの最中で周りには多くの学生や職員がいたにも関わらず、俺は大声を上げてしまった。

初めて、彼の著作を俺が手にしたのは、丁度小学3年生か4年生の時だった。

『船乗りクプクプの冒険』、表紙に大海原と飛び上がる海豚、そしてターバンをまいたアラブっぽい小さな少年の絵が表紙にほっこりと描いてある、新潮社発行の薄い文庫本だった。その親に買って貰った文庫本が、それまで『ズッコケ三人組』のような簡単な児童書しか読んだ事のない俺にとって、初めてのある程度の分量がある本だった。

腹が抜ける位笑った。作者がエタって商業本なのに文章は最初の5ページだけで残りはただの自由帳に化している本が登場する冒頭や、その本の世界の主人公にトリップした主人公の少年。何故か作者の北杜夫とそれを追いかける鬼編集長が出てきたり、元の世界に戻る為に書きを書いてと頼んだり……。今読み返せば何処かで読んだテンプレ臭がそこはかとなくするが、当時は新鮮で、幼い俺にとって凄く面白かった。たぶん、初めて読んだ文庫本がああ云うのだ

ったから、その後本好きになって色々な小説を読み漁り、今はこんな駄文をネットに投稿して一人悦に入るまでになっているのだと思う。

その後も、俺は『楡家の人びと』や『幽霊』、『怪盗ジバコ』から『どくとるマンボウシリーズ』まで、何作か彼の著作を読破した。下劣で単純な、手放しで大笑いできるある種低俗で大衆に迎合した笑い話から、それと全く対極な位置をとるシリアスで深慮な、純粹に文学らしい作品まで創り上げる不思議な作家……、北杜夫は俺の中でそんな印象を持たせる小説家になった。何方の作風にしろ、絶妙な間合いと散見される機知な言葉に満ちた文体は、素晴らしかったと記憶している。

本人は斎藤茂吉の実子である事にコンプレックスを持ち、卑下するコメントを生前多く残したらしいが、そんな事は無かったと俺は思う。事実北杜夫は、同時代の遠藤周作、星新一……等日本の文壇を引っ張ってきた偉大な作家の一人として、十分その地位を確立していた。実際、多くの文学少年に少なからず影響を与えていた筈だ。

だからこそ、彼の訃報は、少なくとも俺にとって非常にショックな出来事だった。文壇を代表する御大だという事を別にしても、多くの影響を受けた好きな作家が鬼籍に名を連ねたという事実を突き付けられる事は、ファンにとっても悲しい事だ。

北杜夫先生、丁重にお悔やみを申し上げます。今まで素晴らしい作品を、本当にありがとうございました。どうか天国で、お父様の斎藤茂吉氏と共に安らかにお眠り下さい。一人の本好き、いえ日本人として、あなたが我が国の文学界に居た事を誇りに思い、またあなたの数々の著作に出会えた事を本当に光栄に感じます。

さようなら。

(默禱)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9711x/>

作家・北杜夫が死んだ件について

2011年11月16日15時28分発行